独立行政法人 国立がん研究センター

世界をリードする 消化器内視鏡診断

Gastrointestinal Endoscopic Diagnosis

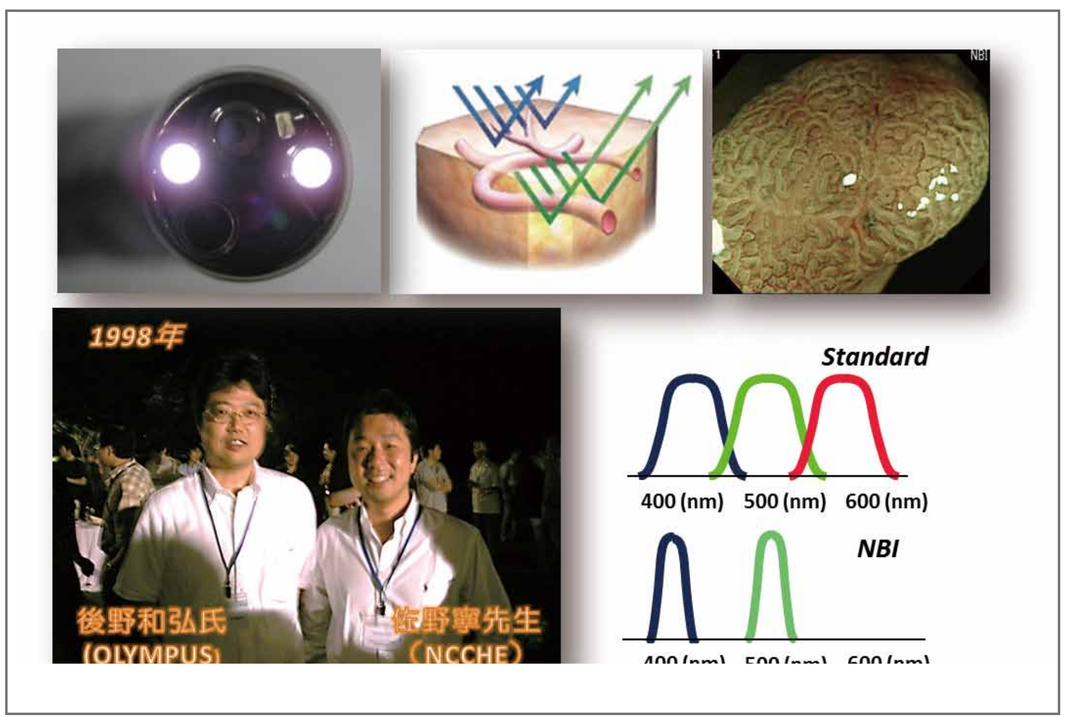
昨今では内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）を代表とする治療内視鏡が注目を集めていますが、治療の前に必ずあるものが診断です。診断が正確かつ詳細に行われなければ、どんなに優れた治療も患者さんにとって正しい利益にはなりません。さらなる診断精度向上のために、産官学の共同研究を進めています。

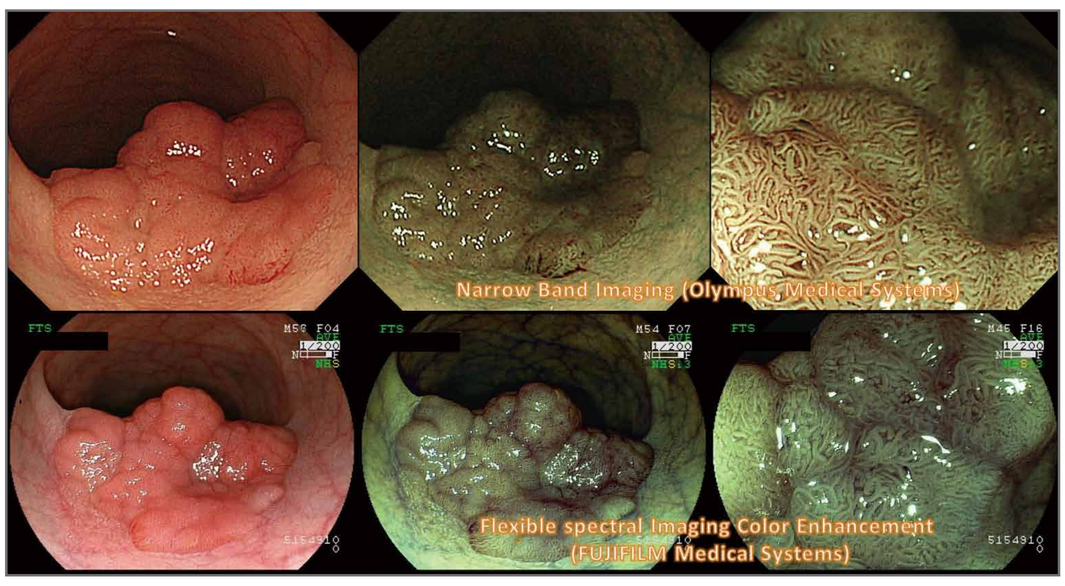
正確かつ詳細な診断が適切な治療を導く

消化器内視鏡の分野において、日本は名実ともに世界のトップランナーであり、これからも世界をリードしていかなければなりません。昨今ではESDを代表とする治療内視鏡が注目を集めていますが、治療の前に必ずあるものが診断です。診断が正確かつ詳細に行われなければ、どんなに優れた治療も患者さんにとって正しい利益にはなりません。

内視鏡診断は、まさにその内視鏡機器とともに発展してきたと言えます。1950年代に胃カメラ、60-70年代にファイバースコープ、80年代に電子内視鏡システムと超音波内視鏡、2000年代にハイビジョン内視鏡システムやカプセル内視鏡、さらに光の波長制御による画像強調観察（Narrow Band Imagingは当センターとオリンパス社が開発しました）が開発され、診断精度の向上に寄与してきました。がんの治療において最も大切なことは早期発見であり、さらなる診断精度向上のために、産官学の共同研究を進めています。

ここまで進んだがん研究





製作：中央病院内視鏡科　画像協力：オリンパス/フジフィルム